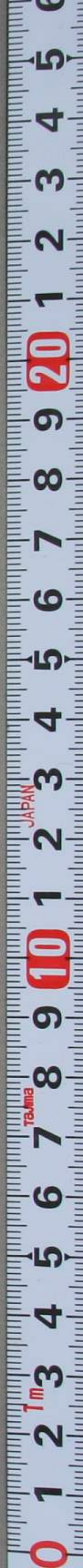


絲櫻春蝶奇縁

前編

四

好
へ達13
1579
4



13
1.679
4

絲櫻春蝶奇縁卷之四



東都 曲亭馬琴 編述

第五段

矢野平通と白又と伏と
小糸女が才管領子辞ふ

天文十七年九月上旬、神原矢野平の鎌倉へたら歸りて、五十四塚東六郎が
言受まゝに、越を管領憲政へ、すえわづ。宿所へ退れ、一子、狹五郎と
小草が正を物づくし。此度もくろく、誓縁を結びたるゆゑにあらり。
當座に聘物とて、胡蝶の小鞆と贈り、うを告あはし。その日、小草
書したる扇をとと、うとよ、一、狹五郎へられとて、その平蹟を賞嘆
し、五十四塚の武藝勇敢の豫さ、すくとも、うの、うの、うの、うの、うの、
大人の、い、ゆ、ひ、たる、もの、あら、推、辞、した、もの、あら、い、ん、ん、ん、ん、
彼人の

糸櫻春蝶奇縁卷之四



丁をわねとひらうこそで。間毎の亮隔を関をららう。便室の
 ういゆれてる金。このふ父の一封の送書を前よかた。今
 肚を切たると。浮く。て。漬る鮮血と共。俯きたれつ。
 のま。吃。断。う。たり。杖五郎の。ま。を。見。て。駭。け。膝
 ま。り。蕩。て。右。子。の。刃。を。握。會。父。の。養。母。を。楚。足。ト
 ぶ。め。た。ひ。と。膝。より。入。ま。て。を。を。起。し。う。を
 ぶ。り。数。回。喚。甦。く。流。る。涙。を。揮。拂。ひ。喃。り。大。人
 五十四塚の。遅。糸。を。付。る。び。ひ。た。た。と
 思。食。く。と。や。自。殺。志。ぬ。ひ。飲。の。ま。り。ふ。胸。を。あ。ひ。て
 巾。の。乱。ま。り。飲。む。ま。を。あ。ひ。決。ま。ら。と。こ。一。言。杖
 五郎。ま。如。此。と。告。ぐ。ぬ。ま。あ。び。く。み。歩。を。運。び。神。は。仏。よ

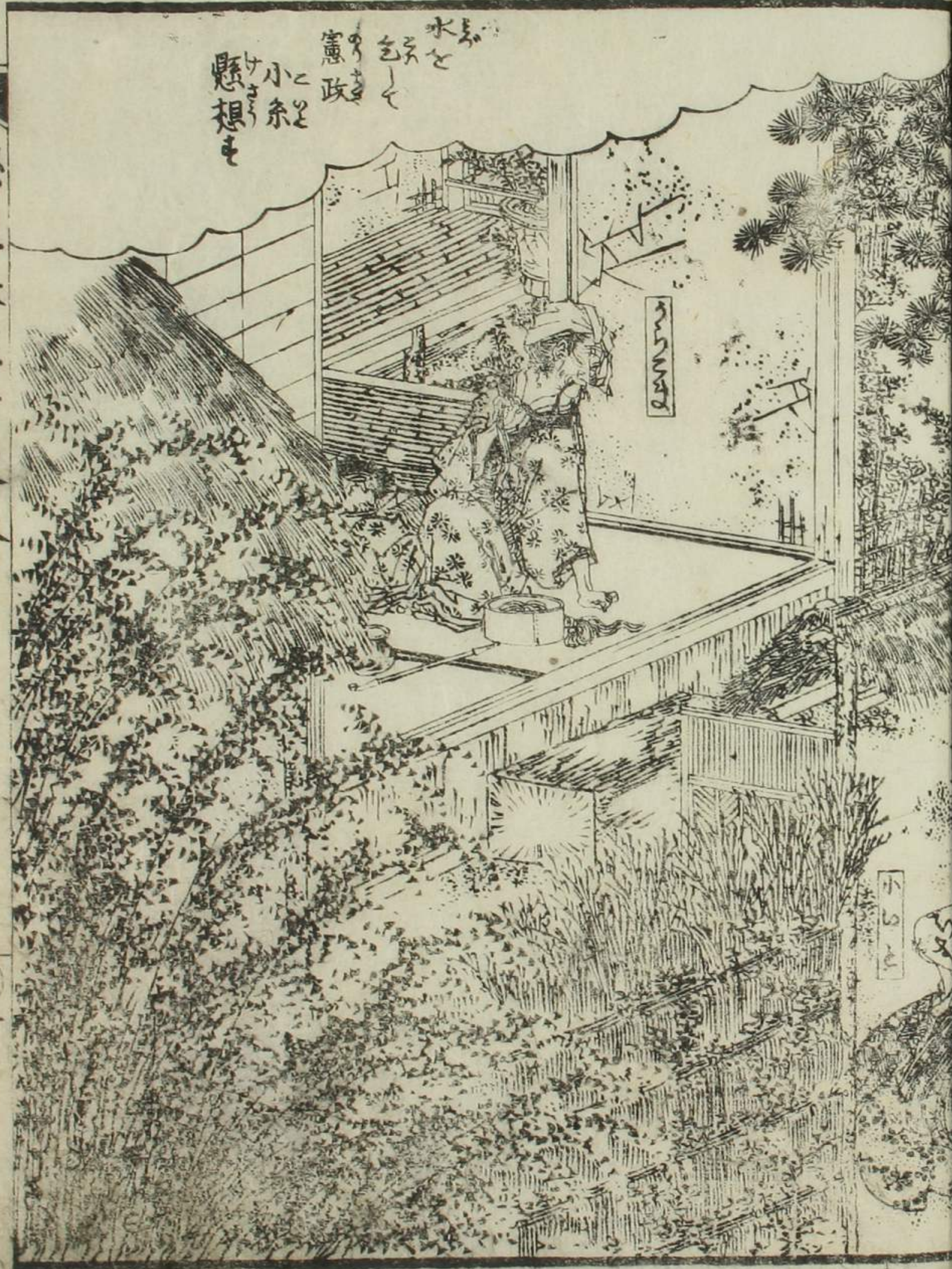
願言をめぐらも。是。う。か。大。人。の。閉。居。を。と。や。免
 ら。て。入。る。ま。り。ま。の。玉。の。年。を。祝。す。ま。り。ん。
 と。あ。誠。の。早。振。神。と。仏。の。利。益。を。け。い。
 そ。ら。げ。も。榎。嶋。より。賽。小。七。里。の。濱。笹
 の。子。共。か。ひ。れ。揚。る。流。木。の。そ。が。中。に。被
 松。の。板。子。小。寫。せ。文字。の。い。ぬ。九。月。十。七。日。
 遠。江。灘。や。て。五。十。四。塚。親。子。が。入。水。の。と。死
 ら。れ。名。を。如。此。ぞ。苗。ゆ。ら。れ。か。る
 證。据。よ。彼。人。の。遅。糸。乃。疑。念。と
 春。を。も。や。う。げ。氷。の。ご。と。く。解。ら。る。ふ
 早。ま。く。自。殺。志。ぬ。ひ。の。不。禍。神。の。賞。祿。と



人。を。あ。ら。わ。す。の
 こ。の。し。が。き
 だ。ら。う
 ち。の。あ。い。こ
 あ。い。こ
 あ。い。こ
 慈。法。和。尚

峯の猿猴もよままべく。涼山の鹿もよまべく。彼俊落が女兒再びらまや
 生まらん誰がまよふや。と主従のあひまげ耳を例くら。憲改朝臣の白屋の
 門邊にま在左右をうんづり。且くは小休ひく。足を洗んとあめ湯を
 乞う。と仰ぐれば近習の武士うけあつて。片折戸をうち敲死誰りあつて
 ぞ。山内の管領家放棄すよあひて。目今ををるるあめ泥土より
 塗まぬべ。足を洗んと仰ぐよ鹽をうら。洗は清えく。湯を進らまは
 鳴ればあらあ。琴の音絶て阿とあつて頓あつて且くして登然と内より
 折戸をうらまをるれば二八才の少女あり。めらめて装ひ飾らねと素顔白く
 一。夏の土峯の如く。眉根翠より。春の好少の似たり。顔の三月の櫻
 花を欺て晴風情月の意をあらめ。眼の秋夜の二星よ似て。常は
 雨の恨雲の愁を食む。玉貌妖嬈とて。芳容窈窕たり。湯を進らま。

かしらうらまをるて。右もよ食たる白濁扇。月も宿らざると愛たく
 書たるを蹴たつて。鬚く。管領よんせまぬらせ。重の言さあつて
 あつてけ。憲政近くまうて。その國扇あつて。とよまうて沈冷じ
 のゆる文明十八年。七月中院精谷の館より陣没したる。大夫判官大田
 持資がうらう。比一山里は猶らと驟雨。山まの。白屋よまわつて
 蓑を借らんといひ。内より女子出迎へ七重八重花の咲も。山吹の
 みのひらぐ。あだぞうあつて。古歌を吟う。は。竟は蓑戎備よりければ。
 持資そのるるをゆき。不與くと宿所よ。或人の物より。うら。めて
 秋のころ奴知覚。武備餘ありとも文備あられば。名おとりのあつて。
 今まを月日をうらう。うらう。と文道よ疎り。うら。うら。梅よりけり。
 くれう詩歌よらるるをうら。和漢の書籍よ。皆窺。竟は文武の良むと。



食ハ武士たるもの。恥ヲ呼ビしむる。主君の仰ニ背ク。天高花比ハ厚子也。
 牙を容る。牙。新まうか。仰りあら。天神比紙の冥罰を。牙ハ
 立比。天雷。移る。言を致し誓ひ。憲政怡悦斜。左右の入を
 退けて。狹五郎と近く招れ。意中の機密。敵城へ赴く。反回苦肉
 の計を行。おまの。名越の切通。獵を。辻田の盡。く
 備。美を。彼背棋。嬪婦。女兒。小糸。と。め
 ろ。村酒。人。酔。野。花。と。多。一。び。香。漆。遣。捨
 と。捨。忘。忘。日。彼。小。糸。を。迎。ら。ん
 を。名。氏。を。写。了。獵。箭。一。條。苗。あ。れ。明。白。す
 老。争。諫。め。必。絆。の。破。と。あ。ん。汝。竊。背。棋。白。屋。抄。え
 小。糸。共。巨。福。路。谷。別。莊。冊。た。れ。努。人。あ。ら。せ。と。真。実。立

耳語。狹五郎。果。主。の。面。を。う。ち。贖。五。山。説。の。也。殿。主。既。よ
 扇。谷。の。管。領。家。朝。兵。朝。臣。の。姫。君。と。御。誓。縁。を。結。せ。あ。ん。輿。入。も。ら。る
 下。賤。鄙。陋。の。老。女。が。女。兒。を。ほ。と。う。近。く。召。か。し。入。の。物。体。あ。い。ひ。や。繼
 の。事。遣。と。す。悪。吏。十。里。を。走。る。と。速。く。世。の。議。は。思。食。う。え。ら。し。と。當
 家。長。久。の。お。ん。計。策。願。い。ゆ。と。り。せ。も。あ。つ。と。憲。政。の。面。色。忽。比。燒。か。ご。と。く。
 あ。ん。佩。刀。を。み。取。て。右。辺。に。瑞。を。下。と。突。立。せ。れ。狹。五。郎。汝。ハ。今。何。と。の。ひ。つ。る
 言。と。食。ハ。武。士。の。恥。辱。つ。ゆ。ら。り。も。予。が。意。は。背。く。神。罰。立。比。の。蒙。り。て。天
 雷。は。移。れ。ん。と。正。しく。誓。ひ。を。あ。せ。し。め。ら。る。その。席。を。あ。え。と。賢。た。ら
 ち。小。冠。者。が。諫。言。を。た。り。の。と。り。て。主。と。あ。り。て。悔。る。汝。の。い。ふ。が。悔。ま。さ
 ら。ん。悔。ら。ん。あ。つ。と。推。辞。る。い。ふ。を。仰。を。推。辞。づ。れ。ど。微。臣。が。思。心
 業。諫。ま。る。も。忠。義。の。二。字。領。受。ま。る。も。忠。義。の。二。字。清。く。濁。ら。ぬ。君。の

計これよかりの徳であらうとも。彼老婆。金を承りて君を推参
するとのらびいよ。難儀するべし。さゆのらえは是非よ及び。私殿只一刀は
老婆と少女を欲殺し。影を隠し。跡を埋す。事のあらざるを俣ゆ。君
悔まぬのみ。至らば。それの忠義を言えあげて。毎日の肉を護るがう。
是則一旦主君の怒を醸し。朋輩又議らるるとも。厭とや。と同じく。い
あり。それゆも及び。大に。絆を異よ。うのん。致し。数年の海。少くも。この
大刃を。支。うた。狗死たる。親の行名も。あ。ら。く。聖。め。あ。ん。忠。孝。只。この。一。舉
小の。勉。め。と。説。示。し。金。五。十。兩。を。と。う。出。つ。て。竊。し。これ。を。通。よ。よ。と。狹。五。郎
あ。う。其。か。と。件。の。金。を。受。納。め。買。戻。の。越。悉。公。魂。を。徹。し。た。今。更。よ
何。を。議。ま。さ。絆。り。を。異。よ。う。の。ど。り。再。会。も。又。測。り。し。う。う。と。谷。嶺。力
扱。渡。る。日。蔭。よ。身。を。処。と。も。主。君。の。長。久。を。こ。と。冀。し。更。よ。化。ま。る。い。い。と。

蕪つとも。別を。き。う。う。の。そ。う。う。う。去。後。敵。を。景。春。へ。つ。し。と。目。送。て。
頻。り。の。嘆。息。し。た。り。ける。か。う。う。う。狹。五。郎。に。た。く。宿。所。よ。う。の。く。竊。し。旅行。の
用意。し。う。た。後。す。も。人。あ。ら。い。被。し。と。う。の。り。の。い。ま。ひ。う。う。よ。要。て。路。銀。と
とも。子。懐。よ。楚。と。扱。り。親。の。像。見。あ。り。と。衣。裳。雜。具。を。と。私。卒。奴。隸。よ
頼。ら。う。う。う。忌。め。け。た。れ。が。鶴。岡。へ。泰。請。と。い。い。う。う。後。者。と。の。俱。せ。ん。た。う。
ひ。う。う。蓋。う。う。載。た。う。宿。所。を。出。る。弥。生。山。霞。の。細。よ。か。る。鳥。の。万。よ。ひ。う。う。も
絆。を。異。よ。う。う。の。ど。り。と。う。の。ど。り。名。残。い。い。と。惜。る。庭。の。桜。よ。門。の。杏。葉。枝
得失。定。る。た。か。の。か。往。方。を。止。点。の。辻。町。投。り。走。り。ま。

第六段

狹五郎怒て背棋を教む
小系女哀で薄命を告

薪樵る。藤倉山の東。あ。辻町子。住。ひ。ぬ。る。背。棋。と。い。は。婆。の。残。忍。母。悪。の

癖者あり。その素生をいつふと向原の大塚の奴流る。よろめぬの妻
 なり。夫死す。後、身が随ふ。類。淫毒をのこる。世に
 あり。困窮至極。とれ。貧乏のころ。年。五。十。の。比。怪
 あり。悪棍。黒平。との。杜。丁。と。謀。あり。東。海。道。を。編。歴。し。妍。童
 女。を。勾。引。し。東。の。西。の。系。浪。津。へ。賣。や。し。南。の。め。て。物。せ。し。ら。
 北。國。へ。賣。り。し。年。末。を。終。り。後。十。二。年。に。比。冬。も。十。月。の。中。流。る。け。ん。
 彼。黒。平。の。後。若。夫。龍。川。を。つ。き。ま。と。五。六。才。の。女。の。童。を。携。て。越。後。一
 赴。く。女。房。を。あ。ら。じ。子。を。奪。ひ。母。を。賣。ん。と。事。十。二。分。子。校。計。が。途。中。に。猛。お
 相。譚。する。支。黨。の。も。ろ。度。受。て。姨。姪。舟。一。村。長。より。捕。捕。せ。んと。し。て
 その。母。を。捨。採。奪。する。女。の。童。を。脊。負。ひ。辛。く。して。黒。平。の。う。と。も。相。摸。る。
 大。塚。へ。逃。げ。り。彼。女。の。童。を。賣。ん。と。する。年。僅。小。六。の。身。價。い。く。の。残

る。も。た。う。に。實。の。あ。り。梢。の。花。より。あ。る。眉。目。の。入。る。ま。に。ど。れ。か。る。ま。と。珠。珠。と
 玉。は。瑕。や。今。う。ろ。些。大。に。け。り。て。賣。ぶ。や。と。思。ひ。し。う。ま。ま。取。り。て。藤。倉。の。
 辻。町。へ。居。代。移。り。彼。女。の。童。を。小。糸。と。名。け。て。苛。刺。遣。使。ひ。む。ご。の。宿
 る。ど。う。の。口。は。ま。生。活。も。時。と。て。僥。倖。な。る。ま。あ。る。後。も。件。の。黒。平。の。姨。お。は
 た。悪。棍。の。餓。鬼。の。物。小。脾。虫。つ。ら。て。背。棋。の。動。と。れ。が。俵。小。債。を。負。せ
 ら。れ。て。残。り。夫。と。幾。回。と。い。ふ。を。去。り。移。り。困。り。果。て。追。遠。離。十。年。以。下。往
 か。ま。ま。だ。か。ぐ。て。月。日。の。う。ろ。も。ま。り。小。糸。が。容。止。いと。艶。妖。で。む。じ。各。々。お
 白。拍。子。華。落。の。静。手。裁。の。千。壽。喜。瀬。川。の。亀。菜。と。い。ふ。も。あ。く。あ。ぬ。女
 る。れ。が。背。棋。漫。ふ。二。三。火。賣。り。宿。拵。女。と。な。り。た。り。牙。價。お。ま。り。あり。
 お。ほ。じ。く。の。富。翁。威。徳。さ。ら。上。ぎ。の。側。室。と。り。ま。の。ら。く。ま。り。け。が。為。り
 揺。銭。樹。と。り。ん。靴。ぬ。種。子。の。み。の。と。ど。と。肚。裏。あ。て。遠。く。と。り。う。り。年。十

糸掛者蛇舌録巻四

二六

二の比りして琴三弦を習て此の本流をいれよけし。事就ちて不待
 びて十四五条ふあひし比り。まのびくふ嫖客もあわ。酒宴の席へも
 参るとて。あぐふ勸まじも。小糸のゆる生活せ。うたても。この後。常
 あぐて後つど。その度。お背棋。うら。後生。く。罵。小刀汁。この度。死
 股。も。い。ど。賢。も。い。ど。突。立て。責。懲。せ。も。小。糸。の。目。死。塚。忍。び。く。一
 じ。び。も。承。引。ど。ま。く。して。ま。の。春。の。幸。十。七。ふ。あ。ひ。し。う。バ。物。の。あ。れ。を。身。あ。ぐ。て。う
 六。才。の。と。死。は。別。ま。じ。う。二。親。の。う。好。の。う。い。と。た。る。け。く。ま。ど。も。か。舊。里。の
 神。風。の。存。勢。と。い。ふ。の。と。忘。れ。は。福。と。女。子。と。生。且。し。い。ひ。あ。ら。わ。た。て。索。ん。こ。も
 ぬ。い。ま。ど。母。が。像。見。の。印。籠。の。胸。の。獲。袋。小。棄。て。も。あ。か。う。ど。る。は。親。同。胞。の
 り。の。こ。ど。ひ。つ。く。と。ど。敷。三。ふ。は。む。ど。栲。衣。新。羅。の。琴。を。持。標。し。憂。を。奏。と。る
 お。し。も。あ。れ。い。ひ。も。あ。け。ど。内。あ。る。管。領。小。見。系。と。浅。く。は。笑。え。ぬ。し。

言。察。の。ち。あ。を。喜。し。も。受。ど。世。は。威。勢。あ。る。僧。神。の。月。さ。う。ち。く。侍。ん。し。う。は
 備。の。嫉。忌。の。殊。文。あ。て。公。苦。し。め。の。こ。と。聽。て。ま。つ。る。こ。も。あ。り。う。や。會。し。く
 世。を。り。る。と。も。才。長。て。祿。あ。る。夫。小。配。が。百。奉。の。苦。し。め。も。樂。も。共。ふ。ま。と。教
 かい。の。あ。ん。ん。入。る。ま。な。ぬ。給。復。の。願。い。も。と。ま。い。も。袂。の。耽。る。家。刀。自。の。ま。
 い。も。寝。ら。れ。ぬ。ま。ど。あ。ぐ。て。積。早。の。未。明。お。起。く。神。棚。を。う。た。掃。ひ。味。酒。を。供
 次。奉。を。ま。わ。り。し。管。領。う。り。迎。の。侍。者。と。今。致。く。こ。ま。も。ま。と。く。明。白。大。推。辞
 か。秘。く。身。ひ。と。あ。ね。さ。ら。つ。瞻。る。空。の。八。重。霞。夕。陽。西。は。傾。死。ぬ。浩。如。は。一。個。の
 武。士。背。棋。か。門。小。末。て。内。の。ま。う。と。え。入。ま。う。編。笠。を。う。ん。取。る。年。十。八。九。と。い。え
 ち。あ。ぐ。春。の。翠。微。の。額。髪。雪。を。う。づ。け。と。容。止。の。女。子。お。と。ぞ。ん。ま。り。し。ま。き。
 柳。條。の。袴。お。風。光。る。皂。丸。小。袖。お。五。段。金。他。の。両。刀。の。膺。塗。の。鞆。お。標。槍。の。糸
 朝。い。づ。ま。の。駸。の。郎。君。う。と。ま。ど。つ。く。從。者。も。あ。く。ま。つ。り。折。戸。を。推。開。し

あつきの刀自の宿所ありや。管領よりおん使をこおのりんと呼門ぞ。
 背棋のんを愛も果む慌忙たまり出あふ。背棋と云ふ儻ふけり暮
 める日歩のそがして。そのあつきの暖和の裏衣の汗濡けん。小糸茶衣
 よわせせむや。誘ふること上座へ推居て扇に扇を敷待態も痛痛く窓の
 母より坐をこけて腰ある扇を傷おたひの。刀自のそと熱待多き。これの
 管領近習の士神原狭五郎と云ふもの。のこ竊に待ぶる。そのあつと
 のよ背棋ころを召て耳よりよとれは狭五郎の彼首を首をせんかつて。
 どのも嘆息し。いひかゝる面がせるといひで叶ぬ胸をさし條を少
 多。そのあつが君猫坐のめくる。且くくは熱多ひて小糸とやんは愛
 こもいひ。叮嚀お仰せ。執事老の甲乙をや知く。面を犯し辣やうせむ。
 君のゆころお伴やぐて。律音お整ひて。その律音道理お稱へる。憲政

朝臣のいぬる比扇谷家の姫君と婚縁を結びむ。おん興入は近也ふ。
 刀自の坐お榮利お引きて。小糸を君所へ進ぶ。るが殿のおん為の。いひこ
 絶てその牙の為あらば。それごとく一旦女見を召まんと。浅くぬ仰を殿
 より変易のあまおん。おん親親子面。この知あると。たの御夫婦の
 間も。うらぶ。扇谷家と確執する。びの。おん。と家隸老黨ありひふ。
 或のい。争ひ辣め。或の婚姻をい。かして。たておん安くせむ。おん。ら
 意味を汲りて。そのの苗おられる。殿の猫箒を返す。おん。代郷へ移りて
 自ら。おん。謙倉。おん。おん。賢女節婦の名を。おん。當家の主従。おん。おん。
 徳義を。おん。おん。おん。五十金受納め。轉宅の雜費。おん。おん。
 福と叮嚀お祝論。齋。おん。金を扇お裁恭。く。おん。おん。背棋の。おん。
 たも。おん。阿くと冷笑の。長生。おん。おん。と嗚呼。おん。おん。おん。おん。

御前でも墓谷の三平二満でも去く殿の正妻おせまも近の親子諸共
 君所へ侍興を推居て負乏施由もよる富婁那が辨を立板へ掃拭する
 水おせぬといひたすの悪口雑言抑ふらけらるる所
 食有理それもあるこそ武士よりのものがくおまふさびもされ枉て兼引
 ぬひ孫と依るまういへ背向まう又後方より引く袖をうね拂ひて冷笑ひ
 年老て何れいりまても耳の疎くて寝言も足ぬ額髪乳乃
 臭の芳ぬ人を教ふ物数いへ夜も深るん女界もろとも君所へまうて
 殿中のみて面ういふべれと紙のりぞのぼせ小糸のるぞや人の白の之膳く
 おての事果ど裳をさく多揚てぞくまごやといれまればあま席を添よて
 立んとされば杖又帝の連々刀の端小裳を突前めくまふ理うり口
 いひ賞めても横紙を破るとま杖又帝が刀おけて立せのせじを定めて

回春をせよといへば如狐とんぬりてまう秘伝人の急状をかん月の足在
 貸のせど晴著布子の裾綿抜ん妨とると踏くせバオもるま又引
 袂と神と拂ひもあむ痛着をあげて神原が背胸前嫌ひるづげさあ
 磯と打うられて尻を左にお受右にお引扱く刃のえり大刀風刃で背棋
 肩先四五寸砍著れば苦と叫びて仰さぬ不倒とんとして喘ぎまう。見んく
 刃をわともせどお拘おせんとうん階り。組を沈で揮むと死小髻の際を丁と
 破る破らして半面半熟の杯福は似る鮮血のくまるお深疾るれも此由
 弱く嗚て挑争ふる小糸の吐嗔と立駈ぎ人をけん由鄰家の遠せんま
 帯の中よりこと断ぎてその身は撞と輾轉をんぬりもせだ杖入席へ跳り
 落て背棋をむらむらんと破創せば二更の鐘を音とる。常迅速頓生

着意種花
毛不活
無心挿栢
栢成蔭

阿ま
ち子
その
夜
乃

狹五郎

あま



著心堂

月

有明

白川山の

うづ
えん

うけ張

小いと



菩提南を阿彌陀佛と唱つる月蝨くを蹴りて刀尖咽喉へ刺徹し抜く
 血刃より海へ倒す下す伏沈む小糸が領上引起しん汝ホと怒る
 るけほど道理を連言せ致場し。説諭を火徳されば己と成るを鬼しく
 人と殺すも主君の為なる世の仇るけん世の常言も細小る虫を
 殺して巨大る虫を助くといふとあり。汝ホ親子が命を預せ六西管領の
 さるる。郎黨家臣数千人賤夫山見のをさすでも凡牙庇を蒙れり。
 安く平けく。餘福を受けても異は終らん。揚貴妃死と唐祚復。麗之姫
 獲れて晋國乱る。これ花露か才るて五湖の孤舟を沈め國家の
 為小益毒を除けどつやく各致雨りのふあぶどり存命るが空を更
 牙の黒生條の苔衣佛の道おとけ入るて。叮嚀ふ菩提を吊ん母を怒りて
 又仇の及ぶ果るも過世の業因けふその命運とさひ捨て成仏せよ南無
 阿彌陀佛と言ふが刀の下吐唾と叫びてまう退き不足癡てせんども
 る息を吻れ忠も亦もある益良雄の刃を楯と牙の海令。浅すう
 逃がれせむと今般ふ一言のやうはり。とへせもあはし声とあり文この
 期ふらびて何の空人言を設隙を窺い逃ともりて脱とさす又を受よ
 と威勢猛く。又あり揚る刀の下を彼首是首へん潜り。行燈撲地と端蹴
 せ。圍のあやし。狭五郎が踏込で唇刀尖高く閃々。仰意の腐索度矢
 と断拂へ。瓦落末とさる板戸の隙より。其日あまりの月の影隈なく
 ささか牙の反り。脱さるるの電光石火のとも烈しく衝かれら。牙を
 沈めて受流と楯立立琴絃へえて柳の小糸あり乱る肩もめりれ
 る。黒髪ある并揃の齒と挽より。髪を大刀同く争ひか移て
 ややく小琴めて刃とさけさる。猛と武士といつるも。定終りく付と

新撰者蝶音傳巻四

廿二

の夜いふべしと成るものせど一個の女子を物じく殺すものどおど。
 春の夜いふ短くとも無妄時放て最期の一句吐て哀と恋し牙のるた
 後小舊里へ言きてあつた。この世彼世の迷いの雲霧るんりの哀情たす。
 ひろん小ととと悲心されば狭五郎吐てうら兵刃刃をひけごも公儀まば牙の
 るた後小舊里へ言きてうら兵刃刃をひけごも公儀まば牙の
 かねあやや。ぞいづんといそませむ故回目を掛ひつらん親の仇郷より。
 實背棋か子あははは。昨年六のとた友ありて離別の母は携りられ地方を何と
 辨ちと縁と寒けは比ふ旅文縁と。途きうあぬはは。舟悪棍ホ又んうたれて。
 母とととを引離されつらううら一の比へはは仇の女児と鳴まら。去年小
 今年と物ころ。あれが知るす恨く。あそほく又哀れは母の往方と
 父のうらひうらの姉もあつた。いひの長は別小舊里へ住むといふことなれ縁と。

里の名を縁と稱べ天津雁翅借りても牙の憂を言傳やらんうらもる。志のひ
 志のひ小嫖客もあつた。酒宴の酌を執せとて刀向う毎日打懲を呵責を
 忍びて牙を任せど人の側室とあること。牙の栄はつべた。とらも武士の
 子にはつら。といひうけく又位沈めは狭五郎吐てうら驚た原来とあること。此月棋
 との親子あつた。うらうけく。六才のとたはうら引られ。幸来仇は後ひく。舊里乃
 名を志るとも父の名字を志るとあるや。と向はうやく頭を擡幸来牙副
 懐を放て衣襟は袋小籠くる。印籠の母の像見曙明と字してはつら。うら
 臍帯小字世。数字字天文二年九月十七日双生と五十四塚東六郎が二女。
 止り子とあつた。うらうけく。うらうら。後小舊里へ贈りてはつら。と世とある
 父を慕う子が神るぬ牙の掛獲囊解てんさる由痛く。狭五郎のあつた
 ども小膝を拍て驚嘆。原来その名を隠てはつら。五十四塚ぬの次女小草が

妹止み子刀袂とどろこくと撲た北きたと坐まし。又またを身みと投な捨すれば。そのそのひひるるああくく
 つつらら及及日ひららがが乳ち名なをを別わかちちままままああれれけんけん縁ゆかり故こをを告つぐぐ人ひととと向むかひひままぐぐ
 嘆なげ息いき。事ことををみみかんかん牙かののああららぬぬ由ゆととううららうう。つつらら親おや神かみ原はら矢や所ところ平へいととんん牙かがが又またとと
 従したが兄あに牙か箇か様さまのの故ゆゑありありてて去こ年ねんのの秋あき日ひかか又またののんん使つかいをを承うけりり。存い勢せのの安あ懐わいへへ
 赴おもむききてて東あづま六むつぬぬへへ及及糸いとのの恩おん命めい作つくるる序あはしし某なにかととんん牙かがが姉あねとと婚こゑん縁えんををととりり
 結むすぶぶててあるあるここうう。如ごと此このの小こ鞆たもとをを贈くわりり。小こ草くさ不ふ書かせせ一ひと扇あふぎをを家い累つと東あづま國くにへへ海うみりり
 てて来こぬぬ人ひとをを訪まねねびびてて幸さい暮くままてて主ま君ぎみのの禮れい責せきををかかててるる。ああひひかか結むすぶぶここらら
 又またへへ忽たち地ち又また不ふ伏ふせせぬぬひひ死し。そのその日ひそのその時ときももううららるる。七しち里りのの濱はま不ふ流ながしし寄よりりとと我われ。
 板い子こ不ふ字じせせ一ひと文ぶん字じををんん不ふ比ひとと九く月げつ十じゅう七しち日にち五ご十じゅう四し條じょうぬぬへへ小こ草くさををおおてて水みづ乃のをを
 東あづま國くにへへ赴おもむききてて遠とほ江えのの難がたああくくてて風ふう傳でんのの難がた脱だつ々々。親おや子こののああ共とも入い水みづのの
 よよ紙かみあるあるととれれいいばば仰あや天てん。ききりり及及まま六むつ又またのの臨りん終しゅう悲ひ數すうのの涙なみだハハちち乾かわくくとと。
 忌果いみぐわこれこれがが家い例れいののままああくく。そのそのふふ出い仕しのの奉ほう公こうをを下くだめめふふ。ああひひららけけるる密みつのの使し
 君きみのの命いのち不ふ隨ずいふふとと死しハハ却かえ君きみののんん為ためあるあるままとと推おし辞じハハ不ふ臣しん弱じやく輩はいのの疎そ言ごん聽ぎんるる
 づづももああらら後ごハハ長なが尾びぬぬとと相あひ謀まわりり。利り又また誘いふふてて北きた月げつ棋き亦またをを遠とほ離ざりんんととつつれれども。
 事こと成なりらら後ごハハ是ぜ非ひまま及及びびてて波なみ々々をを教しくく。んん牙かをを害がいすす。君きみのの為ため不ふ禍わざはひをを後ごんん
 ととああひひ一ひと忠ちゆう義ぎのの鋼こう鉄てつもも勿な心こころ地ぢ冷れいるるんん牙かがが素す生せい。ままハハ縁ゆかりああるる。小こ草くさがが妹い又またがが
 今いま殺ころすすののひひつつららのの。是これををああひひ殺ころすすハハ切きるる不ふ断たつととまま取とりり縁ゆかりとと恩おん義ぎ孝こう
 ろろんんととととれれハハ忠ちゆうるるままとと忠ちゆう進しんめめハハ不ふ孝こうあるある。ああらら武ぶ運うん不ふ竭げつるる飲いととらら死し
 口くち殺ころつつああららままとと置おききままととるる袖そでのの糸いと。言こと葉はのの末すえままううけけてて知しるる。小こ糸いとハハいいとと
 位ゐ沈しん。いいららんんととととれれハハ胸むね前まへ積つみとと痞へいふふ子こもも撲たくく。亡な日ひもも絶たててままらら波なみのの底そこ一ひと
 沈しん。ままままとと姉あねハハ前まへ迹あとるる松まつのの世よ間ま又また結むすぶぶららひひるるはは縁ゆかりととれれああひひかかののああららまま
 姉あねハハ前まへののああららまま最さい期き今いま般ぱんのの恨うらみままままととままをを朽くととしし。形かたちるる果はままひひ

忌果いみぐわこれこれがが家い例れいののままああくく。そのそのふふ出い仕しのの奉ほう公こうをを下くだめめふふ。ああひひららけけるる密みつのの使し
 君きみのの命いのち不ふ隨ずいふふとと死しハハ却かえ君きみののんん為ためあるあるままとと推おし辞じハハ不ふ臣しん弱じやく輩はいのの疎そ言ごん聽ぎんるる
 づづももああらら後ごハハ長なが尾びぬぬとと相あひ謀まわりり。利り又また誘いふふてて北きた月げつ棋き亦またをを遠とほ離ざりんんととつつれれども。
 事こと成なりらら後ごハハ是ぜ非ひまま及及びびてて波なみ々々をを教しくく。んん牙かをを害がいすす。君きみのの為ため不ふ禍わざはひをを後ごんん
 ととああひひ一ひと忠ちゆう義ぎのの鋼こう鉄てつもも勿な心こころ地ぢ冷れいるるんん牙かがが素す生せい。ままハハ縁ゆかりああるる。小こ草くさがが妹い又またがが
 今いま殺ころすすののひひつつららのの。是これををああひひ殺ころすすハハ切きるる不ふ断たつととまま取とりり縁ゆかりとと恩おん義ぎ孝こう
 ろろんんととととれれハハ忠ちゆうるるままとと忠ちゆう進しんめめハハ不ふ孝こうあるある。ああらら武ぶ運うん不ふ竭げつるる飲いととらら死し
 口くち殺ころつつああららままとと置おききままととるる袖そでのの糸いと。言こと葉はのの末すえままううけけてて知しるる。小こ糸いとハハいいとと
 位ゐ沈しん。いいららんんととととれれハハ胸むね前まへ積つみとと痞へいふふ子こもも撲たくく。亡な日ひもも絶たててままらら波なみのの底そこ一ひと
 沈しん。ままままとと姉あねハハ前まへ迹あとるる松まつのの世よ間ま又また結むすぶぶららひひるるはは縁ゆかりととれれああひひかかののああららまま
 姉あねハハ前まへののああららまま最さい期き今いま般ぱんのの恨うらみままままととままをを朽くととしし。形かたちるる果はままひひ

新撰者言集卷四

けんその日へのつある悪日るんが親子の共うこの流と消る沖津波
 別と一幸の遠江灘と空くさ恨れ風の傍りあつて小侶る死後の小夜
 衛子か母鳥小あふりもなう青こびりた身ひちを何れして存命べたを
 名教と校五郎ぬ。忠臣といつてある。こも城へへ女向のひら。だもまも
 るうへと背向はなうするまある。子指組て胸はれ目と岡頂と伸せども
 狭五郎の立もあつて。又の鮮血を拭き。鞋を履て丁と納め名を告録す
 繫きて死せりそ。健氣るれも背棋を教せ。こも城に居るのこ入うす
 ちん身を害せんや。あつてこも城に居る人といひ。懐橙揚て紙小写せ。四箇の
 戒名一對の父母も。其二幸へ則ちん身が又といつて。二号の妻小草父母へ則ちんが
 身の幸その幸乱して備がた。ちん身の末はまされくまれ親の遺言の今も
 かも。耳底もまらう。あつてそれもあつて。絶るんて。息の下ふ其を倍と

齊し。あつて狭五郎。小草妹あつて。縁場どてのらう。各名をのふり
 あつて。彼窠く。獨居る。小草とあつて。妻あつて。かゆも東六と世女が
 枉死のあつて。一旦誓ひ。武士の戒を果さんとあつて。親がうす。背月くる。
 といひ。送るれ。今宵のう。未然と察し。あつて。言傳り。多た誓ひ。則ち父母も
 こそ。これ又ちん身が。愛て。助んといふ。あつて。言傳り。多た誓ひ。則ち父母も
 君も。照覧あつて。幸四家。小草も。齊せ。あつて。日陰の。元身。のる。果を
 天は。任して。ちん身と。共。教を。埋め。遠く。去りて。時を。俟らん。君も。怒れ。明輩も
 乱齊の人と。憎む。とも。扇谷。と。君と。故る。婚姻。整ひて。両家。和順す
 深も。ちん身の。ぬれ。衣。の。厭。あつて。足も。汚る。あつて。小糸。の。や。く。涙を
 禁め。憑り。た。言の。誓。あつて。捨。命。と。共。教。獲。あつて。あつて。刀。自。が
 枉死。あつて。実母。の。為。あつて。然。あつて。十年。あつて。親。あつて。代。生。の。縁

恩を今更仇中て亡骸とつもの歎めよ。あるうたつた墓所。一采乃花由
 子向ふ今宵有まて人あふぬ罪障とるせん。許さぬと正首よ死骸と
 對ひ学を合し。うら念とれが狭五郎也。猪共よろら念下。懐紙よ暮と
 くる。金五十兩とらふふ北首お臥しうける。背棋が頭髪を執社て此彼楚と
 結び苗め備の視引し。て遠く黒堀るじ。筆ふとらう。身を起し
 出居の障子へ数約の遺書我志と所ありて刀自背棋を殺し畢。あは死
 怨あるふあふと。己と死ぶるの。因て遺し。五千金鄰人郷黨あれを
 取て昔提と吊ひる。天文十八年三月廿一日の夜嘆息して筆を闇神原
 狭五郎と書写す。主君の禱を写される。獵箭を跡への。と。谷本より
 断取て行袱お務め。血は塗まてる袴と共に上衣を纏て脱捨れ。襦袢と
 用意の行装。人目をつむ編笠。志の便りの臘月曇る。胸の十寸。清



狭五郎
 小糸
 武藏
 武蔵

夫木
 のお
 わりと
 りんろ
 跡あり
 あけ
 せれ
 世々
 まる
 う邦

狭五郎

小いと

糸掛春葉子巻四

七二

